

特258

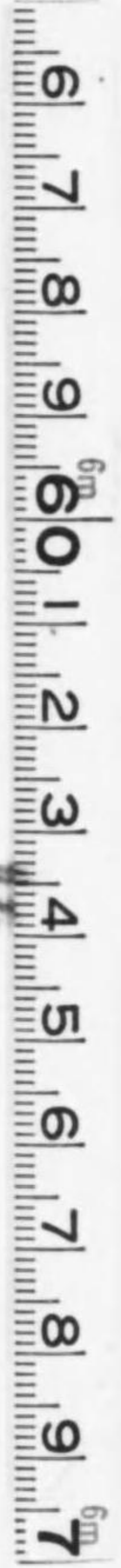
139

309

282

長谷川流石書

行書杜詩



始



行 258  
139



東山氣  
鴻濛宮



殿

居

上

頭

君

來

必

十

月

樹

羽

臨

九州陸

火者玉

泉噴薄

漲藪幽

有時浴

赤日光

樓閣風  
抱空中

下

轍

跡

曠

原

延

冥

搜

沸

天

萬

乘

嘉  
觀  
水

百  
丈  
湫

函  
靈  
斯

可  
悟  
王

命官屬

休初聞

龍用壯

聖名權



林  
邱  
中

夜  
窟  
宅

政  
移  
困  
風  
雨  
秋

流 泊  
味 澹  
如 江

池 倒  
影 懸  
屈 瑶

甘露漿

揮弄滑

且柔翠

旗澹偃

蹇  
蹇  
蹇  
蹇  
蹇  
蹇  
蹇  
蹇  
蹇  
蹇

紛  
少  
留

蕭  
蕭  
蕭  
蕭  
蕭  
蕭  
蕭  
蕭  
蕭  
蕭

四  
溟  
異

香  
洪  
漪

淳  
鮫  
人

敵  
徽  
緝

曾  
祝  
沈

豪牛百

祥奔盛

明古先

莫能倚

坡院舍

蝦蟆出

見蓋有

由至尊

頤之咲

王母不

宵校復

歸虛多



廬  
化  
作

長  
黃  
虬

飄  
飄  
青

瑣  
郎  
文

清  
深  
絕  
水  
聽  
曲

鈎  
彩  
浩  
冊  
貌  
瑚

# 者 愁

奉同郭給事湯東靈漱作 杜少陵

大正丙寅夏五

浪石長敏書



奉同郭給事湯東靈漱作 杜少陵

東山氣鴻濛。宮殿居上頭。  
君來必十月。樹羽臨九州。  
陰火煑玉泉。噴薄漲巖幽。  
有時浴赤日。光抱空中樓。  
闐風入轍跡。曠原延冥搜。  
沸天萬乘動。觀水百丈湫。  
幽靈斯可怪。王命官屬休。  
初聞龍用壯。擘石摧林邱。  
中夜窟宅改。移因風雨秋。  
倒懸瑤池影。屈注滄江流。  
味如甘露漿。揮弄滑且柔。  
翠旗澹偃蹇。雲車紛少留。  
簫鼓蕩四溟。異香汎滌浮。  
鮫人獻微綃。曾祝沈豪牛。  
百祥奔盛明。古先莫能儔。  
坡陀金蝦蟆。出見蓋有由。  
至尊顧之笑。王母不肯收。  
復歸虛無底。化作長黃虬。  
飄飄青瑣郎。文彩珊瑚鉤。  
浩歌淅水曲。清絕聽者愁。

郭給事に奉同して湯東靈漱に作るを申すのでありますから、是は郭給事と申す役人、其人は驪山の温泉へ行幸中である玄宗皇帝の駕に扈從の列に在りました所の人であつたと見へるのであります。そこで杜少陵が其、驪山の麓を經まして、偶々當時の供奉の中に郭給事と申す友達が有るに付て、其人を尋ねたのであります。それで、郭給事が驪山の名所を一々案内を致して笑れたのであります。其人と同じく、湯東の靈漱と申す處へ參つて拵へました詩であります。

東山氣鴻濛。と申す五字が、全篇を籠罩いたして居る大字眼であります。元來此、鴻濛と申すことは、即ち温泉の湯氣が立湧りまして居る處を申すのであります。其湯氣の濃濁と能く辨別し易からざる間から、奇怪不思議なる現象が出て參ります譯であります。それで、全篇は總て此鴻濛といふ字から出たものであると言つて差支ないと思ひます。東山氣鴻濛たるのは何であるか、見渡せば其氣鴻濛たる間に、一つの宮殿が見へることである。此處は天子の毎年必ず行幸になる處であつて、我天子の行幸のあるのは、必ず十月と極まつて居るのである。天子が行幸になつて居る間は、天子の御座所であるといふ大體をば、此の經項に於てられ、冬籠りをなされて、三月ばかりの間は、天下九州の政を、暫く此の經項に於て御執りになる譯である。

此處は元々、温泉の在る場所でありまして、一層露深く立籠めて鴻濛として居る。其泉は玉の如く滑らかにして冷いものであるが、陰火が燃へて居つて、それに依つて、岩の畔より噴出して、蒸るが如く流れて參りますから、温泉と云ふのである。有時浴赤日。と云ふ處よりして、多く故事に依つて寫されてあります。其故事は何であるか申すに、周の穆王と申す人の事實を考ました穆天子傳と申すものを土著に致しまして、多くその故事を以て點綴してあります。周の穆王は、崑崙山といふ山へ行つて、西王母といふ者と宴會を致したと申すことが、先づ最も事實で、穆天子と申せば、

必ず西王母が附物のやうになつて居ります。そこで今の玄宗皇帝もそれと同じ事でありまして、玄宗皇帝と申せば、必ず楊貴妃が附物でありますから、玄宗皇帝と楊貴妃の事を申すには、穆天子と西王母の事が、誠を持つて來いと云ふ故事であります。そこで是から後に崑崙の事を驪山に比して言はうといふ、作者の意でありまして、崑崙山に緣故のあります。日は成池に浴すといふことを持つて參つて、有時浴赤日。と申したのであります。併し太陽は固より君の象であります。即ち天子が此温泉に行幸になつて居つて、時々御入浴になるを申す事を寫したのであります。上頭宮殿の、光り輝くばかりに思はれる時は、即ち天子が温泉に御入浴になつて居る時といふことが想像されるのである。

闐風入轍跡。曠原延冥搜。此、闐風と申すのも、曠原と申すのも、何れも穆天子傳にございます地名であります。穆王が八駿の馬を驅りまして崑崙山の經項まで登つて參りますと、山の頂が三角になつて居つて、其一角を闐風嶺と稱した、其嶺までも八駿の轍跡が及んだといふ事が書いてあります。それから又た、穆天子は西王母に別れて、北の方、曠原と申す廣い原野まで車を容れられたと申す事があります。其、曠原と申すのは、當前の平野といふ事で、別段故事が無くても使へさうであります。故らに此處に用ひましたのは、矢張り穆天子傳中の地名を用ひましたのであります。決して尋常一様に唯、平原と廣く使ひます場合は、少し違ひます譯であります。

萬衆の車駕を何處に移されるかといふと、今日は特別に百丈湫と申す、怪しき沼の水を御覽になる爲に御動座を仰出された。特に天子をして此處へ御出にならむる様な事になつたのは、此沼に何か幽怪なる物が在るのであらう、如何にもさうである、此沼は幽靈、怪むべく致して、極めて奇妙不思議なる沼でありますから、そこで特に天子が御座を移されて之を御覽になるといふことに相成つたそれのみならず、天子

が麗澤を御覽なされるが爲に、官廳一同に、特別に休暇を賜はるるといふ事であつた。其、官廳に休暇を賜はつたが故に、偶々杜子美が此處に行合せまして、郭給事なる人に案内せられて、此詩を作りましたのでありますから、是は必要なる所の文字であります。

此沼は、元來龍山には無かつたのであります。一夜の中に出来た。龍が天上をいたし、俄かに窟宅を移しましたものであります。今まで居りました住家が、變じて新機な沼となつた譯で、即ち龍が壯を用いたのである。今まで此處に窟宅いたして居つた龍が、俄かに己れの壯を用いて暴れ出して石を壁き林邱を擯いて、真夜半頃に、己れの住處をば、何處やら他へ移して仕舞いました。それも何かの勢ひを假りて、なければならぬ。折しも非常な大風雨の夜でありましたに依つて、其風雨の力を假りて、何處にも無き窟宅を移しました。それに依つて、今まで龍の居りました跡が、變じて此機な大きな沼と相成つたのであります。是即ち麗澤の置たる所以である。

さうして其沼が出来てから、此處に温泉が出来たので、麗宮といふものも造られましたのであります。其麗宮の直下に此沼が在りますから、それで倒懸池影と申しました。此池影といふのも、矢張り麗天子の傳中に、四王母と麗王とが宴會した場所の池を假りて參りまして、さうして此温泉殿の影が、倒懸に沼の中に映つて見へるを申すことを言ふのであります。風注澄江流。といふのは、此沼より水が流れ出し山の下の方に、大なる川となつて流れます事、倒懸池影といふのは、沼の上から見た形、風注澄江流。といふのは、沼の下の方を申すのであります。それから、味如甘露漿。揮弄且柔。といふのは、俄かに出来た機な沼でありましたから、其れは非常に清冽で、隨つて之を嘗めるといふこと、自づから甘露を飲むが如き味に致す。それのみならず、其水は極めて濃厚でありまして、尋常一機の水とは違つて居る。之を

揮弄いたすと、滑かにして且つ柔である。

麗澤といふのは天子の御旗、即ち翠華の旗であります。麗澤の水の動く視で、麗澤といふのは下に垂れて動く視であります。今まで翠華の旗を押し立て、天子が沼の處まで御出でになつた、其旗は唯かに横の方に閃きまして動いて居つたが、留まると同時に、下へ垂れて仕舞ひました。そこで愈々御宴會といふ事になりまして、麗澤の聲が、四溟の水を蕩かしますの何處も無く、怪氣なる香が、淡濛として浮んで参つた。水面に怪しき香が浮んで居るのは何かと思ふと、天子が行幸になつたといふことを知りまして、此水の底より致して、水中の神で、極めて精巧なる禮物を造るを申す、鮫人と申す者が水面に現はれて、鮫と申す禮物を献上しやうとする。さうかと思ふと、曾祝と申す神官が、鮫牛といふ機な犧牲を水中に沈めて、水の神を祭られて居る。此、曾祝が牛を沈めるといふ事も、矢張り麗天子傳に出て居ります事でありました。其有禮といふのは、宛も百祥が我盛明の下に奉つて参つたと思ふ位の譯で、之を古への聖帝賢王の時代に比して、曾て是程の事をば見ないことであらう。斯く申したのであります。坡陀金銀蟻。から、化作長黃虵。までは、此詩の出来ました大眼目の處であります。丁度、天子の前へ参し百祥が参つて居る、然る處に、向ふの堤の處から致して、恐ろしい金色の蝦蟇が仰ひ出して参つた。此蝦蟇が出て参つたといふのも、決して偶然では無い、蓋、由ある事であらうと考へる。天子は、朕を見やうといふので、蝦蟇までが出て参つた、と仰せられて、之を顧みて笑はれた。王母、即ち楊貴妃は、どうも何だか氣味が悪いものだから、ア、云ふ物が参つては困りますといふて、手に收めなかつた。蝦蟇も、祥瑞に應じて出て来たけれど、王母が收めないから、又た元その奥底の知れない沼の中へ歸つた。すると今迄は蝦蟇であつたと思つたが、實は蝦蟇では無くして、水の底へ這入つて見ると、恐

ろしい長い黄色の體となつて水中に蟠つた。是れ即ち祥瑞の方から申すと、水底に居る虵が、偶々、天子の御笑を招かんが爲に、蝦蟇に化けて坡陀から出て参つて、さうして天子の御機を伺つたものと見へる事でありました。それは表面の事でありまして、深く尋ねて申しますれば、固より安藤山の事を申したに相違ないであります。楊國忠が安藤山を留めやうといふ意があつたのであれ共、玄宗が御入内にならなかつたといふのは、矢張り安藤山から楊貴妃へ取入る處があつて、藤山を都に置かずとも、還してやつたが宜からうといふことを、楊貴妃が天子へ申上げたことが有るに相違ない。そこで、王母不肯取。といふ事を申したのであります。一旦都へ呼ばれた安藤山は、流陽へ還つて、それから愈々謀叛と首ふ計畫を運らしたといふのは、所謂の化作長黃虵。といふ所の現象であります。虵は固より天子であり、黃は天子の衣の色合でありますから、藤山が流陽へ還つて、非常に麗澤の機舞になつて、愈々謀叛をするといふことが目前に現はれるといふ意が、自づから此中に籠つて居ります。

此處までと先づ本篇の意は盡きました。元來、郭給事と一緒に麗澤へ行つて、此詩が出来ましたのでありますからして是丈の事はかりで置きますと、自分の意志は充分に發表が出来ますけれど、其意をば麗澤が無き機な譯でありますからそこで此處へ餘筆として、宮中の役所、曾祝の給事たる、我が郭氏は、文彩の極めて立派な方であつて、その文彩を喰へて言ふならば、曲つて居ります瑞瑞を持つて参つた機な文彩を有して居る。其郭給事といふ御方が、此、流水の曲に、我を案内せられて詩を作られた。如何にも清絶なる詩を、郭給事が作られたに付、我も亦た此の如き詩を作つて、同じく流水の曲に於て高聲を致すのであるが、是は御目出度い話を列べたのでありますから、聽く者驚ふるに及ばぬと申すのであります。實に底意に國家の事を懸るが爲に此詞を作つて安藤山を放逐されたといふことは、此上も無い失策であるといふ意味を述べるのでありますから、其の意味を解する者があつたならば、必ず驚ふるであらうと申すのであります。

昭和三年七月二十日印刷  
昭和三年七月廿五日發行

行書社 詩  
定價九拾錢

著者 長谷川 鎮  
名古屋市中區南段治町四ノ九  
編輯兼發行人 小島 末廣  
名古屋市中區南大津町二ノ三  
印刷所 扶桑社 英比 貞造  
名古屋市中區橋本町一ノ一〇  
發行所 不律會總書部

終